HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	本を巡る人との出会い
Author(s)	岡本, 健
Citation	Sauvage : 北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院院生論集, 8, 29-34
Issue Date	2012-03
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/49155
Type	bulletin (article)
File Information	Sau8_003.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

本を巡る人との出会い

岡本　健
観光創造専攻　博士後期課程

Sauvage8 号読者の皆さん、こんにちは。岡本健と申します。突然ですが、本は良いですね。本を読むのは無論楽しいものですが、私は大学院生活の中で、本を巡って様々な人に出会うことができました。専門書や論文を巡って研究者と出会えたことはもちろん、普通に研究を続けているだけでは出会うはずが無かった人々と出会うこともできました。

今回ご紹介する本は 2 冊『北海道裏観光ガイド』と『義男の空』です。『北海道裏観光ガイド』はガイドブック、『義男の空』はマンガです。内容も分野も全く違うこの 2 冊、共通点はどちらも著者が北海道の方だということです。そして、幸運なことに、私はこのお二人にひょんなことからお会いすることができ、直接いろいろなことを学ばせていただきました。

この「本の紹介」は、一般的な「書評」とは違って、私が、本を巡って人と出会った記録です。本には作り手の想いが込められます。この想いに触れられるので、本は楽しい。私たちが書く論文も同じではないでしょうか。作り手、書き手に出会えると作品の読み方が大きく変わり、また違った楽しみ方ができる。逆に文章を書いたり読んだりすることによって、思わぬ人との出会いにつながって、人生が豊かになることもある。多くの本の読者となり、また、論文の著者になる皆さんに、このことが伝わると良いなと思っています。多くの本と、そして人と出会える大学院へようこそ。

『北海道裏観光ガイド』NPO 法人北海道冒険芸術出版

【本の紹介タイトル】

観光のまなざしを裏返すガイドブック

１．ウラ？

『北海道裏観光ガイド』と聞いて何を思い浮かべますか？なんせ、ウラ、である。ただならぬ気配を感じるではないか。「非合法な何物か」や「エロティックな何事か」を連想させるただならぬ気配を。このいかがわしさは名前だけではない。本書はショッキングピンクの袋に厳重に密封されて販売されている。いわゆる「ビニ本」というやつだ。「ビニ本」について詳述は避けたいが、お行儀のよい内容でないことは想定の範囲内である。しかも、大変有り難いことに「観光」と書いてある。私は、曲がりなりにも観光研究者の端くれである。しかるに、この本は買わねばならぬ。うん、やましい気持ちはないんだよ、だって、ねぇ、しょうがないじゃない、研究のためだもの、と自分に言い聞かせながら、なぜか誇らしげな気持ちで本書を購入した。

２．裏切り？

自宅に帰って、いそいそとカバンの中から『北海道裏観光ガイド』を取り出す。ショッキングピンクの袋の封を外そうと試みる。すごい勢いで接着されている。この厳重さがまた良いではないか。中身の背徳感がますますアップしようというもの。さて、封を開けると、中から 3 冊の本が出てきた。本をぱらぱらとめくると、なんとなく期待していたようなヤバいものは何もない。反射的に「だまされた！」と憤った。…いや、待て待て、落ち着け、元々研究のために買ってるんだからこれでいいのさ。先ほどは中身見たさに夢中になって封を解いてしまったが、落ち着いてショッキングピンクのビニールカバーを見なおすと、出版社は「NPO 法人」を名乗っている。そんなヤバい本を NPO 法人が出しているわけないじゃない。それに、『北海道裏観光ガイド』のロゴ、良いデザインだ。中身の冊子の写真もなんかアーティスティックで素敵だ。これはもしかしたら、本物の掘り出し物を見つけてしまったかもしれん。一抹の残念さとともに、とりあえず正座した。

３．北海道の表裏

この面妖な本は、いったい誰が作ったのか。北海道冒険芸術出版、という漢字だらけの一見堅そうで、でも実は意味がよくわからない[1]出版社の代表は堀直人氏である。有り難いことに評者は堀さんとひょんなことから知り合い、様々な機会にお

---

[1] でも「なんかすごいことをやろうとしてる！」ということはびんびん伝わってくる。

話をさせていただいている。「どうしてまた裏なんですか？」と尋ねると、堀さんは裏の話を始める前に表の話を始めた。北海道のオモテとは何か。たとえば、カニ、たとえば、ラベンダー、たとえば、クラーク像、たとえば、いくら丼、たとえば、ラーメン、たとえば、キタキツネ、たとえば、雪まつり…。こういったイメージが混然一体となってオモテ面を形成している。これらの多くは観光客向けのパンフレットやガイドブックに掲載されている北海道のイメージである。つまるところ、一般に広く流布している「北海道らしさ」のイメージがオモテ面であると言えよう。では、ウラは？それは、ぜひ本書をお読みいただきたい。

４．まなざしを裏返すメディア

…と言ってしまっては本の紹介にならないので、中身のことも少し書かせていただく。3 冊のうちの 1 冊を手に取り、めくってみる。目次のページが開いた。そこにあるタイトルを以下に列挙してみる。「ex-キングムー」「ハヨピラ」「ホテル農協」「ドライブイン アベ」「シゲチャンランド」とある。「え～と、コレ北海道デスカ？」。どこにも「札幌」「富良野」「知床」なんてのは挙がっていないのである。「旭川の美味しいラーメン屋さん 100 連発！」などの特集も無ければ、「お土産に最適な○○」といったお買いもの欲を刺激する情報も無し。

まだ観光らしいのは、ホテルと書いてある「ホテル農協」くらいか。ちょっと見てみよう。ページを開いて目に飛び込んでくるのは巨大なボーリングのピンがそそり立つ廃墟らしき建物である。ピンには何やら文字が書いてある。「社長さんもあなたも私も皆同じ」なんだこりゃ？解説を読むと「ホテル農協」というのは、利用客に野菜を配っていたラブホテルなんだそうだ[2)]。なんと！評者が最初に期待したいかがわしい情報がここにあった（笑）。まぁ、それは良いとして、さらに読み進めよう。ラブホテルと言ってイメージするものの中に、ホテルの入り口のところにある「空室」「満室」の表示がある。これが、ホテル農協バージョンになると「不作」「大豊作」なんだそう。空室で「不作」はないだろうに（笑）。しかも、帰りにはオーナーが育てた野菜がいただけたのだとか。残念ながら現在は廃業しており、立ち入り禁止だそうだ[3)]。このようなわくわくするスポットが北海道内各地で 42 か所も紹介されているのが本書である。

旅行者が観光地に注ぐ「まなざし」はメディアによって作られる、というのはよく言われる話だ。堀さんの言うオモテ面は、まさにそのようにして作られた「まなざし」だろう。ではこの裏観光ガイドはなんだ？そういったオモテの「まなざし」に対抗するためのアングラ的なメディアだろうか？いや、本書にはそういった「押しつけがましさ」は無い。提示しているのは、多様性なのである。「こういう見方だってありじゃない？」と。オモテを堪能したら、ウラ面も見てみてよ、きっと北海道をもっと好きになるよ。そうやって優しく観光の「まなざし」それ自体をひっくり返して、北海道の多様な面を見せてくれる、そんな観光ガイドなのである。

---

2) 野菜を配るのはラブホテルの仕事の範疇ではないことは評者も理解しているが、このように解説されているので仕方がない。

3) ちなみに旭川市にあるとのこと。

『義男の空』エアーダイブ

【本の紹介タイトル】

現実に向き合うためのマンガ

１．興味を持てない読者諸氏へ

マンガ『義男の空』をご存じだろうか。第 15 回文化庁メディア芸術祭で審査委員会推薦作品に入選したマンガである。北海道在住の小児脳神経外科医、「魔術師」と呼ばれるほどの腕利き医師、高橋義男先生とその患者さんの物語。この情報で「読みたい！」と思われたあなたは幸運である。今すぐこの文章を読むのをやめて書店に行き、1～5 巻をすべて買ってくると良い。このマンガは素晴らしいマンガだ。私が保障します。

では、この先の文章は誰のために書いているのか。それは、上の情報だけ聞いて「読みたい！」どころか、「ふうん、興味ないなぁ」なんて思ってしまう方々のためである。「偉そうに！お前はいったいなに様だ？」と思われた向きもあるだろう。よろしい。私の『義男の空』の第一印象を述べさせていただこうじゃありませんか。まず、〇〇賞受賞！という肩書があまり好きではない。皆が認める、というところにウソさを感じてしまう。そして、お医者さん物、しかも、「小児」脳神経外科医だ。子供の病気をブラックジャック先生さながらに治療して、両親から感謝される、そんなお涙ちょうだい物なんだろう、云々。残念ながら、私は当初こんなふうに思ってしまった大馬鹿野郎なのであった…。合掌。

２．この人が描いたマンガなら読む！

私は通常、この「どうせ〇〇に違いない」モードで向き合った本達とは、しばらく顔を合わせることが無い。さらにたちの悪いことに、このモードで向き合っている状態で、他の人から「このマンガ、すごく良いんだよ！」とかオススメされると、余計に避ける。「いやいや、だまされまへんで！」というわけだ。せっかく良かれと思って薦めてくださっているのに、あまのじゃく過ぎて我ながら嫌になる。

では、どうして、今私は「義男の空」既読者になり、このような文章まで書こうと思い至ったのか。それは、本書を制作しているエアーダイブの田中宏明社長と出会ったからである。評者は、コンテンツツーリズムを研究領域にしており[4]、北海道マンガ研究会というところで理事をさせていただいている。田中社長との出会いは、この研究会の席でだ。田中社長は物腰が非常に柔らかで、とても丁寧に接してくださった。初めて研究会に参加した際には、評者の研究についてお話させていただいたのだが、まとまりのない私の話を熱心に聞いてくださり、「この研究は面白いですね」と言ってくださる…。「ずいぶん腰の低い丁寧な方だなぁ」これが私の第一

---

[4] コンテンツツーリズムというのは、アニメやマンガ、映画などのコンテンツに関わる観光振興や旅行行動のことである。

印象である。まず間違いなく偏見だろうが、マンガ家の先生、となると気難しかったり、人づきあいがよくなかったり、するんじゃないか、なんて思っていたのだ[5]。

その後、北海道マンガ研究会では、マンタビという企画に関わった。これは、札幌にあるマンガの舞台を示したマップを制作し、それを元にモニターツアーを行う、というもの。『義男の空』は、前述したとおり、北海道の医師のお話である。札幌も出てくる。そのため、マップにも舞台が掲載され、ツアーコースにもその場所が組み込まれた。問題は、ツアーのガイドである。なんと、あろうことか私に依頼が来たのだ。いつも物事を頼まれると、それだけで気持ちよくなってしまい、出来もしないのに「あっはっは！大丈夫ですよ！」とか答えてしまって、あとで後悔するのが悪い癖。告白すると、札幌が舞台のマンガにそんなに詳しいわけではない。さぁ、どうしよう！！そんな時、田中社長がツアーに同行してくださることになったのである。地獄に仏とはまさにこのことだ。

田中社長はツアーに出かける前に参加者の皆さんに講演をしてくださっただけでなく、ツアー中ずっとご同行くださった。また、天候も悪い中、『義男の空』の中で描かれている幌平橋について、現地で詳細な解説をしてくださったのである。「なんて、良い人なんだ！この人が描いたマンガなら読む！！」

３．リアルをリアルに

というわけで、先に作者に出会って、それから作品を読む、というなかなか無いパターンで『義男の空』を読んだ。泣いた。良いマンガだ。過去の自分をぶん殴りたくなるぐらいだ。うん。

この時期、私の妻は夜な夜な『聖☆おにいさん』や『テルマエ・ロマエ』を読んでは、げらげら笑っていたのだが、私は自分の感動もさめやらぬまま「『義男の空』も読むべし！」と全巻積んだ。妻はタイトルから何を勘違いしたのか、番長物か何かだと思ったらしい[6]。大して興味を示さなかった。それでもしつこく「良いから読め！いや、読んでください！」と食い下がる夫が面倒になったのか、一巻を手に取った。そこから五巻まで一気呵成に読み、何度も泣いていた。そうだよなぁ、やっぱいいよなぁ、『義男の空』。

しかし、何故良いのだろう。まず断っておきたいのは、『義男の空』は、私が懸念[7]していたような、〇〇賞入選をウリにしたものでも、お涙ちょうだい的ありきたり展開のマンガでも無いことである。このマンガは、田中社長の強い「想い」によって成立し、自立しているマンガなのである。

そして、「ザ・あまのじゃく」の私も素直に涙してしまう一番の原因は、人間のリアルをリアルに描いている点である。義男先生の「魔術」によって助かる子供もいれば、残念ながら亡くなってしまう子供もいる。マンガ的展開だと、「あぁ、この子は助かるパターンだろ」とか思えるような子も、亡くなってしまったりする。当たり前だ、現実はマンガの「展開」とは違う。また、作中では義男先生の過去も丁

---

5) これは、そのまま「大学院生」を名乗る私自身が言われることでもある。自分のことは棚上げにしているのだ。

6) 無理からぬところである。私が『魁!!男塾』を愛してやまないからだ。

7) というか手前勝手な邪推である。

寧に描かれるのだが、それも嘘くささがない。もちろんマンガであるから、作り事の「お話」の部分もあるのだろう。あるのだろうが、田中社長の綿密な取材によるところが大きく、嘘っぽさが全然無いのだ。作中で描かれるキャラクターはまぎれもない「人間」で、起こる出来事が「リアル」なのである。

４．人間の善きことに触れる

さて、他にリアルをリアルに描いたマンガと言えばなんだろう。評者がすぐに思い浮かべるのは『はだしのゲン』である。私が『はだしのゲン』と出会ったのは、通っていた小学校の図書室である。小学校の図書室にあるマンガは『はだしのゲン』のみ[8]。活字とマンガが並んでいるとついついマンガに手が伸びてしまう岡本少年は、図書室に行っては『はだしのゲン』。この作品は、広島に落とされた原子爆弾による被害の状況を描いた作品である。28 歳になった今もこのマンガは大変印象に残っている。しかし、あまり良い感情とともにではない[9]。確か、ラストシーンは、原爆の被害にあっても「それでも強く生きていこう」という決意とともに終わっていたように記憶しているが、当時の岡本少年の心には「人間はこんなにむごいことをやらかす恐ろしいもんなんや」ということが強く刻まれたのであった。

どうしてこのような話を突然持ち出したかと言うと、『義男の空』が小学校の図書室に入っていると小耳にはさんだからである。『義男の空』のような、人間のリアルの中の善き部分を感じることができる作品が小学校の図書室に置いてある。これは、本当に素晴らしいことだ。なぜかはわからないが、日本で「教育的」と言う場合、だいたいが悲劇的であったり、説教的であったり、逆に、意志を強く持て！目標に向かって邁進せよ！さすればうまくいく！というようなメッセージを強く含むように思う。不思議である。人生そんなに単純じゃないさ。悪いことばかりでもなけりゃ良いことばかりでもない。それくらい小学生でもなんとなく分かっている。

『義男の空』は、本当にリアルだ。人間生きていれば「理不尽」に直面する。そして、その「理不尽」は、努力ですべて解決するわけでもない。どれだけがんばっても思い通りにならないことがある。それでも、「やればできる！」と信じ、現実を直視して懸命に立ち向かうことの大切さ、そんな時に力になってくれる人とのつながり、それを教えてくれるのが『義男の空』。久々に、人間の善きことに直接触れさせてくれたマンガである。

---

8) 自宅の近くの市営図書館には『火の鳥』があったように記憶している。小学生の時『火の鳥』はまだ難しくてよくわからなかった。

9) だからといって『はだしのゲン』が作品の素晴らしさを欠くわけではないことは言うまでもない。私は本書から多くを学んだ。